

『和泉式部歌集』(ノートルダム清心女子大学附属図書館所蔵) - 解題と翻刻

著者	小柴 良子
雑誌名	清心語文
号	9
ページ	133-152
発行年	2007-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000257/

『和泉式部哥集』（ノートルダム清心女子大学附属図書館所蔵）

——解題と翻刻——

小柴 良子

解題

ここに翻刻する『和泉式部哥集』は、現在『和泉式部正集』と呼ばれる家集の後半部分である「和泉式部集下」（五七二〜九〇二）^{〔注1〕}に相当するものである。本書の欠落部分は、七二六番の歌から七三一番の詞書までと、八五〇番から八八九番までである。本書は春海本系統の一本で、この欠落箇所は、春海自筆本をはじめ他の春海本系統の本と同じである。

本書はノートルダム清心女子大学附属図書館が所蔵する黒川本である。『特殊文庫目録』の記載書名は『和泉式部歌集』、目録番号は黒一F四五となっている。縦二三・四センチ、横一五・七センチの袋綴本。表紙は全茶布目、左肩に「和泉式部哥集」の題簽が貼付され、右端に「仲田顕忠自筆寫本」と墨書する。内題は「和泉式部哥集」。「黒川真頼藏書」「黒川真道藏書」「黒川真前藏書」の藏書印を有する。料紙は楮、墨付き二三丁、一面の行数は一四行、歌は一行書きである。歌の肩や

上欄に注が付されている。注は歌のかけことばの指摘が主で、校異や難解な歌の説明、類歌や典拠などである。

書写者の仲田顕忠は、『和歌大辞典』によると、

『江戸期歌人』仲田。通称は藤右衛門。号は蓬園。寛政一一（一七九九）万延元年（一八六〇）、六二歳。海野幸典（遊翁）門人。香川景樹に関心をもち、その歌を『桂の落葉』に編し、一方、小林歌城が景樹の家集を評した『桂園一枝拾遺評』に弁駁して、『桂園一枝拾遺再評』を著した。歌集に『仲田顕忠歌集』（無窮会神習文庫に自筆本藏）のほか類題武藏野集・和歌詞の枝折、編著に菅贈太政大臣歌集・双玉類題などがある。^{〔注2〕}

とされる人物である。また、『江戸現存名家一覧』^{〔注3〕}に「○歌人」として「仲田顕忠」と名前があげられているほか、『鯉玉集作者姓名名録』（天保十二年版）三編にも、「顕忠 江戸 仲田藤右エ門」と見え、実際『鯉玉集』三編に顕忠の歌が十首入っている。^{〔注4〕}「^{〔注5〕}當時廣益社家人名録」（天保十三年版）の「ナ部」の欄には「^{〔注6〕}歌中 顕忠 ^{〔注7〕}藤忠 ^{〔注8〕}下谷黒川原藩 仲田藤左エ門」と顕忠の名が確認でき、『^{〔注9〕}現存 江戸文人壽命附』にも、^{〔注10〕}歌の印とともに

「仲田顕忠 よみ哥は 名人なりと 世の人の 評判つよき 仲田大人
大極上々吉壽千年」と評されており、「下谷幡隨院裏」と住所も記され
ている。『國學人物志』（安政六年版）には、「○武藏國」として「顕忠
同 仲田藤石衛門」とある。「同」は「江戸 遠江人」と同じという
ことで、顕忠が遠江の人であったことが知られる。これから、顕忠
が歌人・歌学者として社会的な認知を得ていたことがわかる。

『和泉式部正集』の諸本は、榊原家藏忠次文庫旧藏本（以下、榊原
本）に代表される榊原本系統と、天理図書館藏村田春海自筆本（以下、
春海自筆本）に代表される春海本系統の二系統に大きく分けられる。

本書『和泉式部哥集』の奥書は次のように書かれている。二行目に
「不明」としているのは、のどに入り込み見られない箇所である。

下巻（朱書）

原本歌（不明）六十二枚（朱書）

寛政十一年十二月廿六日寫完

毎水

右和泉式部家集上下巻春海以自筆本寫了

天保三戊辰暮秋執筆至初冬上旬終功

原本文字体用寫畢
皆余親自觀察之

辰 初冬 十一日

顕忠

本集上五百三十七首 連哥一首

同 下三百六首 一首

春海自筆本の奥書は、

下巻（朱書）

原本歌二行六十二枚（朱書）

寛政十一年十二月廿六日寫完

毎水 （朱）

となっている。「毎水」は、吉田幸一氏が春海の海を分解して称した号
であることを判読された （注5）。この春海自筆本の奥書と、本書の奥書
の最初の三行は、一部不明な部分はあるものの、一致している。また、
本書の奥書四行目に、書写した顕忠の識語として見える「春海以自筆
本寫了」の記載からも、本書が春海自筆本を書写したものであること
が窺われる。

仲田顕忠の筆による『和泉式部哥集』は、春海本系統の一本であり、
春海自筆本を書写したものと考えられる。また校異や注も丹念に記し
ている様子が窺われる。『新編国歌大観』や『私家集大成』など、現在
のテキストは榊原本を底本とするが、春海本系統の長所も注目されて
おり、本書は春海自筆本を知る上で重要な一本であろう。

注1 歌番号は、清水文雄「校定本和泉式部集（正・続）新装版」（笠

間書院、平成六年）に拠る。

2 塚田晃信「顕忠」の項『和歌大辞典』（明治書院、昭和六一年）

3 『近世人名録集成』（勉誠社、昭和五一年）に拠る。以下、『鯨

玉集作者姓名録』 （當時）『廣益家人名録』 （現在）『江戸文人壽命附』『國學

人物志』も同じ。

4 吉田幸一「和泉式部集定家本考上資料篇」（古典文庫、平成二

年）の春海自筆本の翻刻を参照した。

〔凡例〕

一、上欄の注は該当する本文の後に〔頭注〕としてあげた。

二、略字体は通行の字体に改めた。（尸↓麻、厂↓雁）

翻刻

よさのうみのあまのしわざとみしものをさもわかやくとし^朱は^綴たる、し
ほかな

〔頭注〕四句 焼二役

ますか、みいとみくるしやむへこそはかけみしひとのかけはみえけれ
内侍なくなりたるころ人に

なけくやとなきをりならはなに、よりおつるなみたと人にいはまし

あひにあひてもと思ふ春はかひもなしはなもかすみめにした、ねは

〔頭注〕上文

つれ／＼^りものの思をれは春の日のめにたつものはかすみわけ

つらしともそれは ひてはおもはぬになほ身にしむ^はくすのうら風

本ノマ、

とへと思ふ人はくちなし色にしてなに、こふらんやへの山ふき

かり人のしたにみをのみかせともくゆるこ、ろのつきすも有かな

うきこともこひしきことも秋の夜の月にはみゆる心ちこそすれ

人きてかへりぬる十月はかりに

わかやとのみちのにしきいかにして心やすくはたつにかあるらん

〔頭注〕五 裁二立

うらむへきかた、にいまはなきものをいかてなみたのみにのこりけん

たむこにありけるほどかみの、はりてくだらざりければ十二月十

よかゆきいみじうふるに^二_十

まつ人はゆきとまりつ、あちきなくとしのみこゆるよさのおほ山

〔頭注〕二句 往二雪

人のかへりことに

としをへて物思ふことはならひにきはなにわかれぬ春しなければ

たむこに

ふれはうしへしとてもまたいか、せんあめのしたよりほかのなければ

〔頭注〕初句 経二降 四句 雨二天下

おなし人に

うきにおひて人もてふれぬあやめ草た、いたつらにねのみなかれて

〔頭注〕初句 憂二泥 五句 哭所泣二根ノ流

山とかいへいでたるにはよめもろともにそありけるをとこのを

り／＼おこせたるふみとをとりもたりけるほかにあたりけるほ

とそのふみのうらにふみかきてよのは、のおこせたりければ

〔頭注〕山と云々ハ人ノ名ニテ大和ナルヘシ端書誤字可考

からころもつまとは君になりはてんむすひをとめよあこかたまつさ

《頭注》むすひと、めよ下かへのつま

山さにて人に

よをかき^{伯耆}るやまさ^{入道}とにても君をまつ心はかりそかはらさりける」^{一ッ}

は、きのにうだうのめに

いつてまたわか身をやらむ山さともいと、ものこそかなしかりけれ^{ち敷}

ゆふくれにちいさきうりを齋院より給はせたるにかきつけてまい^ハらす

らす

ゆふきり^ハはたつをまましやうりふ山こまほしかりしわたりならては

《頭注》二句 立二断

四句 来マ欲ニ―狛ヲソフ

なかたかひたりしあま^尼のけさにむすひつけ、る

あちき^ハなきわれときるへきけさのをのむすほ、れたるとけはとけなん

かしはのよりなにとかやさかみへやるとて

いをたにもやすくねさせてをき風のふきおとしたるかしはの、露

けむもちゆきつねか

うちはふくなみのうへをはきぬなるにすかくれたるか鳥のみえぬは

《頭注》萬葉二人麻呂長歌云

云々玉藻息津藻朝羽振風社依米云々トミユ但シコ、ノ哥ハフ

クハ水鳥ノウヘヲ云ノミ歟

人のおきたりけるか、みのはこをかへしやるとて

かけたにもとまらさりけりますか、みはこのかきりはゆふかひもなし

うつ、にてゆめはかりなる逢事をうつ、はかりのゆめになさはや」^{二ッ}

西宮殿 哥云々

あめもよにかよふ心したえせねはわかころもてのかはくよそなき

それものはあめにぬれくわかそての風にみながらかはかぬやなそ

かきりなきもの思ふ身とそおもひしをけさはたとへむかたのなきかな

たとふへきかたはけふこそなかりけれ昨日をたにもくらししてしかは

くらしでもあくることたになかりせはなにおもはましなにおもはまし

とてもうつくかくてもよそになくく身のはてはいか、はならんとすらん

いと、しくおほつかなきにとし月のゆきかへるかとみゆるけふかな

はなもみなよ ふる風にちりぬらんなにをかあすのなくさめにせん

ひをたにもいくかになりぬと思ひしをけふ、た月に成にけるかな

三月三日

しつめのかきねのもの、のはなもみなすく人けふはありとこそきけ

《頭注》四句 好人ニ酢ヲソフ

ほと、きすゆめにひとこゑき、つれはうつ、ならひにいまたねられす

をりてみし人のほひのおもほえてつねよりをしき春の花かな

《頭注》拾

右衛門督公朝臣

あかさりし君かにほひのこひしさに梅の花をそけさはをりつ

る

初句 折二居

はなみても目をはくらしつあをやきのいとくるしきはよるにそありけ

る

《頭注》四句 絲二甚 苦二操

五句 夜二燃」^{二ッ}

をりよくはみにこぬまでもわかやとのさくらさきぬとつけましものを
うへよりははきのしたはのしたつゆのしほれ おつる秋にもあるかな
かくれなきものにそありける夏衣うすき心はきてもみねとも

〔頭注〕 五句 来二着

わすれぬとつみうる心ちするものをけふのみそきにはらへすて、む
はなす、きまねくたより かひもなししりなる人しみえねは
われをこそかたらはさためあしひきの山時鳥なききかせなん
かけにとてかくる、人はなかりけり身をうの花はさかりなれとも
あやめくささ月ならねとわかそてにひとしれぬねはいか、たえせん

〔頭注〕 四句 哭二根

めのまへにかはりぬめりとみるものをまたわすれすやありしよのこと
ねられねは月をみるたにあるものをみにもしみつるよはの風かな
さよなかに月をみつ、もたかさとにゆきとまりてもなかむらんとは
おちつもるこのはのうへにふる雪のわれもひとりとはなかめさまし
なにも心になふふなりせはひとりさかきのはなをみましや
いは、しやこひのみわたる心にはたえまありともおほえさりけり」
君かすむわたりと思へははつせ川おりたちぬへき心ちこそすれ

にうたう殿のこしきふの内侍こうみたるにのたまはせたる

結詞花

よめのこのこねすみいか、なりぬらんあなうつくしとおもほゆるかな
〔頭注〕 定頼卿集 尼上のはすの数珠を鼠のくひたりけるをみて

よめの子のはちすの玉をくひけるはつみうしなはんとや思ふ
らん

御返

きみにかくよめのことたにしらるればこの。ねすみのつみかるきかな
ひさしうおとせぬ人にわすれくさしのふくさをつ、みてやるとて
もの思へは我がひとかの心にてこれとこれとはしるくみえけり

心にもあらてよそなるをとこのもとにあめのいいたくふるひな
みたのあめのと、ひたるに女もこと人いてきにければ

おのかし、ふれともあめのしたなれば袖はかりこそわかすぬれけれ

〔頭注〕 二句 経二降 三句 天下二雨

てはこおきたるやるとておなし人に

あふことを今はたのまぬ中なれとまたこそあけねしまのこかはこ

〔頭注〕 しまの子か箱は浦嶋の子か箱と云へきをは（不明）云り」

人かたらひたるをとこのもとよりわするなどのみいひおこすれは
いさやまたかはるもしらすいまこそは人の心をもてもならはめ

おなし人つねにわすれぬよしをのみいひおこすれは

あはれともおもひやせましょになる心のあらぬ心なりせは

月あかき夜人きてものかたりなとしてかへりてつとめてさてやあ
かしたま てしとあれは

とこのうへの枕もしらすあかしてきていてにし月のかけをなかめて

かたみにわすれしなとひさしうおとせぬに

〔頭注〕 端詞わすれしなと〔いひてのち〕トアリシカ脱シ歟

さらはいかにわれもおもふやたえぬへきおなし心にちきりてきとて
こと心つきたるをとこさすかにとき／＼きてみるに

みることになとなけかする君ならんおのかかたみにおのれなりつゝ、

たのめ にはたのむる人のおとせぬに

ことはりやかつわすられぬ我にてもあるかなきかにおもふみなれば」^四

たのめてみえぬ人につとめて

やすらひにまきのとをこそさゝさrameいかてあけつる冬のよならん

《頭注》古今

君やこむ我やゆかんのやすらひに横の板ともさゝすねにけり

四句 明二開

もろともにとのみちきる人の中へゆくに

おくれしと我をもすてゝいてたつはなみたにのみやさ〇ちきりけん

といひやりたるかへりことにおくるゝかつらきとのみいひたるわ

れもさすかにいくへきにもあらねは

なかれゆくなみたのかはにうきものはおくらす人とおくれぬるみと

ゆくみちよりとゝまるたましひをかたみににせよといひたるに

わかたまはたひのそらにもまとひなんとむへきそての中はくちにき

この人のうへを思ふさまでいぬるとかたるをきゝて

ちきりしは思ふさまでにおもふとてあらましことをいひし也けり

さみたればもの思ふことそまさりけるなかめのうちになかめくれつゝ、

をとこのほかにあるよ人に物いふさまにみゆれば」^四

ねぬるよのゆめさはがしくみえつるはあふにいのちをかへやしつらん

ひさしうあはぬ人をおもふとてみちもおほえすなといふに

いまよりはふるのゝみちにくさしけみわすれゆくにはさそまとふらん

《頭注》貫之集

いそのかみふるのゝ路の草分て清水くみにはまたも帰らん

あめのいたうふるひなみたのあめのなといひたるに

みし人にわすられてふる袖にこそ身をしる雨はいつもをやまね

《頭注》古今

かすくくし思ひ思はす間かたみ身をしる雨はふりそまされる

おなしをとこかくてはいきたる心ちもせずといひたるに

ありとてもいまはたのまぬ中なれとひたすらなくはなるなとぞ思

《頭注》四句 無二亡

かならずこよひといいひたるをとこのえあふましかりければ

むはたまのこよひはかりをおもひつゝまゝらはゆめにをゝみえ

む

八月はかりに人のきてあふきをおとしてけるをみてたけのはにつ

ゆおほくおきたるかたかきてあるほとへてやるとて

しのゝめにおきてわかれし人よりはひさしくとまる竹のはの露

《頭注》起二置

ほかにかよふをとこいかに思にかありけんいまたゝひと月のほど

わするなといひたるに」^五

そのことゝいはぬさきよりいつともうきをわするゝ時しなければ

世のいときはかしきころ

はかなさにつけてそなけくゆめのよをみはてすなりし人によそへて

もののをのみ思ひしほとにはかなくてあさちかすへのよと也にけり^後

八月十 夜日の夜よなかはかりに

まともめはふきおとろかす風のおとにいと、夜さむになるをしそ思
十月はかりに物にまで、よるとまりたるにたきのおと風のおとの
あはれにきこゆるにかたはらなるつほねにはやうき、し人のおと
すれはいとしのひでさしおかする

うきよにはあらしの風をしるへにてこし山水に袖をぬらしつ

《頭注》二句 嵐二不在

人のもとにいくなりときくをとこのきくのはなにつけてかはらぬ
よいひたるに

かはらしといか、たのまむいまはなほうすむらさきのいろときくく

《頭注》五句 聞二菊

うらみてひさしうおとせぬ人のもとにこと^わは^五り」をたひくいへ
とかへりこともせねは

このたひはことにいて、をうらみてむあ かはなにのみをかすつへき
しもいとしろきつとめて人に

うちはらふともねならねはをし鳥のうはけのしも、けさはさながら
み中なる人のもとよりひてりしてくのみなやけたることわひた
るに

をやまたのなとひたふるにおもふらんつゆのおくてはありもこそすれ

《頭注》二句 一向二引板 四句 遅^{オシ}稲二置

かたらふ人ありときく所にをこのとまりにければつきのあか^き月^に
いひやる

《頭注》つきのあか月云々ハつきのあかきに云々ヲ誤敷

めにちかきそてにもらすは人のよの月ともよそにみるへきものを
いとちかきところにかたらふ人のわたりたるにものいみにてえあ
はす

へたてたるかきのまわたる月ならはかたらはすともかけはみてまし

ひさしうとはぬ人からうじておとしてまたもとねば^六

なかくうかりしま、にやみにせはわする、ほとになりもしなまし
はきのいとおもしろくさきたるところにあめふる日まらうとのき
て物かたりしてかへるに

あめもよにいそくへしやは秋はきのはなみるとてはわざともそくる

いかなる人にかありけむつらふとき、ていひやる

さまく心おきたるつゆなればた、にくさはのうへとやはきく

時くくる人のもとよりくれゆくはかりといひたれば

なかもつ、ことありかほにくらしてもかならずゆめのみえはこそあら
め

《頭注》拾

うつ、にも夢にも人によるしあへはくれゆくはかりうれしき
はなし

物へゆく人にあはむとおもふにえあはてあふきにかきつけてやる
これにのみよそふるたひはあふきてふなにかいまれぬものにそありけ
る

《頭注》四句 かハはノ誤

三句 扇二逢

ひさしうありてとひたる人のかへりことにいしをつゝみてたゝこ
れをみ給へとて

あふことをありし身ながらあるものとおもひいて、や人のとふらんふらん
ものへいく人に

あるほとはうきをみつゝもなくさめつかはなれなはいかにしのはむ
人のもとよりおもはむかたにといひたれば

わすらるゝ時のまもなくうしと思みをこそ人のかたみにはせめ

いとおほつかなきまでおとせぬ人に十二月つこもりの日

なかかではいつれのひをかすくしゝとけふたにとひて人はしれかし

さくらはなまちとほなりといひて

くるゝまもしらぬいのちにかへつゝもおそくさくらはなをこそめめ

《頭注》四句 桜二咲

こしちのかたなる人に

いそきしもこしちのならの月はしもあやなくわれやなけきわたらん

《頭注》二句ハこしちのそら歟

つらけれとわすれしと思人に

うしとても人をわするゝものならはおのか心にあらぬと思はん

時ゝうらめしき人のいまはおとせぬに

そのかみはいかにいひてかうらみけんうきこそななき心也けれ七ナ

たひくゝやるかへりことせぬ人に

なみかへるあともみえぬは水のうへにかすかきはつる心ちこそすれ

《頭注》初句 なみかくる歟

古今十一

ゆく水にかすかくよりもはかなきはおもはぬ人をおもふなり
けり

十月はかりとしころひさしうおとせぬ人に

おとせて秋の過ゆくとしことにうきくもるともしらすかほなる

《頭注》四句ハかきくもる歟

夜ことに人のこむといひてこねはつとめて

こよひさへあらはかくこそおもほえめけふくれぬまのいのちともかな

なからのはしをみて

ありけりとほしはみれともかひそなき舟なからにてわたると思へは

《頭注》四句 船乍二長柄

水のほとりにちとりのたゝひとつたてをみて

ともをなみかはせにのみそたちあけるもゝちとりとはたれかいひけん

あしおほくつみあけたる舟にいきあひて

あしわくるほとにきにけりたつなみのおとにききてしこやなにはかた

しほみちぬとてふねいたす所

おのれたゝみちくるしほもありけるを思人とそわれはふなつる七ナ

くるまかはにて

くるまかはいふなやなとてなけれけんおそろしけにもみえぬわたりを

あみひかせてみるにあみひく人ともものくるしけなれば

あみたふといふにもいほはすくはれぬこやたすくとはたとひなるらん

〔頭注〕 宇治拾遺物語三

昔よりあみた仏のちかひにてにゆるものをはすくふとそしる

初句

阿弥陀仏二網ヲ

風にさはりて舟と、めたる所にかひ、ろひてもてきたるをみて
みる人もなきさにをれはかひなしとおもはぬあまのしわざなるへし

〔頭注〕 三句 詮無二貝 二句 渚二無

そこに風にさはりてひころありけるに

あみのめにかせもとまらぬうらにきてあまならなくなかぬつる哉

かりやしてはまつらにふしてきけはみやことりなく

こととは、ありのまに／＼宮ことり都のことをわれにきかせよ

後拾遺九

いもねられぬま、にさぐれはきぬのぬれたるもあはれなり

あさちふにやとるつゆのみおきあつ、むしのねられぬくさまくらか
な

〔頭注〕 三句 起二置

四句 音二寝

さくらゐこゆるひ」八オ

こえくれはたゞぢ也けりさくらゐとなのみそたかき所なりける

月おもしろきに京を思やりて

みさらんを思おこせてふるさとのこよひの月をたれなむらん

又

宮こにてなめし月をみる時はたひの空ともおほえさりけり

師宮シ
しのひたる人のいたうなるきぬをきてかしこましとてぬきおきた
るやるとて

おとせぬはくるしきものをみにちかくなるといふ人もありけり

〔頭注〕 四句 馴二舊ナルヲ

いとかくつらきをもしらてなむたのむといふ人に

心をはなはしものそあるよりはいさつからん思ひしるやと

〔頭注〕 古今十一

人の身もなはしものをあはすしていき心みん恋やしぬると

われも人もつゝ、むことある中にをとかかく心にもかなはぬこと、

いひけるにかならずつねにうらみらるゝかむつかしければ

おのか身のおのが心になはぬを思は、ものをおもひしりなん」ハウ

いつもへいく人に

めもはるにかくむらくもはへたつともおしはかりには思おこせよ

ゆふくれにとほきさくらみやりて

にほふらんいろもみえねはさくら花心あてにもなかめやるかな

秋のよの月いたうくもりたるに

なかむれとめちにもきりのたちぬれは心やりなる月をたにみす

とほききぬうつおときこゆれば

いたつらにあかす月哉うらやましせこか衣を人はうつつ也

〔頭注〕 遠つみちゆきにしせなを待わひてむなしき闇に衣うつ也

オット
良人ノ為ニ衣ヲ擣事ハ文選付謝惠連カ擣衣詩ニ始見

ひさしうとはぬをいかに思ふらんとといふ人に

いはのうへのたねにまかせてまつほとはいかにひさしきものとかはし
る

〔頭注〕 三句 待二松

古今

たねしあれはいはにもまつはおひにけりこひをしこひはあは
さらめやは

蜻蛉日記

なけきつゝひとりぬるよのあくるまはいかにひさしきものと
かはしる

ものおもふころあるやうある人に

みのうさをしるへきかきりしりぬるをなほなけるゝことやなにごと
心うきをみるゝたのむはわか心にもあらぬにやといふを^九とこに
我もわれ心もしらぬものなれはいかゝつひにはなるとこそそめ

世のはかなきころゆめはかり人にあひて

あるほとにとひみてしかなたえにしはいかはかりうきよとかありしと
あるやうある人にすぎにつけて

みてはさはたつねけりやと心みむしるしにたてたるすきのしたかど

〔頭注〕 古今

わか庵はみわの山下こひしくはとふらひきませ杉たてる門
つれなき心みはてんとてなんこのよにかくてあるといふ人に
ありぬへき人もありけるよの中にわれこそゆめを^とみねはたのまね
わりなくくらむる人に

つのくにのこやとも人をいふへきに隙こそなければあしのやへふき

〔頭注〕 兼盛集

あしのやのこやともいは、つのくにのなにはのことともいはす
あるへき

みなかなる人にほとゝきすにむすひていとなかきしやふのねをく
はせて

そこまではきこえしもせし時鳥袂にかゝるねをみてをしれ

〔頭注〕 五句 根二音

人に

たくひなくうきみ也けり思しる人よにあらはとひもしてまし^九

かたらはんといふ人に

心みにいさかたらはむよの中のこれになくさむことやあるとも

四月はかりにたちはなのさきたるを

たちはなの花さくさとにすまへともむかしをきとふ人のなきかな

おなしころしやうふのかのすゝろにすれは

ほとゝきすしのひのこえもきこへぬにまたきもこゆるあやめ草かな^み

〔頭注〕 四句ハくゆる歟

ものおもふころうのはなをみて

ほとゝきすむへもなきけりうの花のをりはものこそあはれ也けれ

とほき所へいぬる人を思やりて月に

あまのはらいつもなかむる月なれとこよひはそらにやとりぬるかな

ひとしれす思ことあるをはらからにかくなむいふとて

いはつ、しいはねはうとし人を思^かへはもの思まざる物をこそ思へ

れいのものへいにし人を思ひいて、

いかならむせこかたひねの草枕いとかくつゆはおきぬしもせし

〔頭注〕五句ハ起二置^{〇オ}」

ものおもひつゝくるにかなしければ

なにことも心にしめてしのふるにいかてなみたのまつしりにけん

世のいみしうはかなきころ

きこえしもきこえずみしもあらぬよにあはれいつまであらんとすらん

三月つこもりに

中くゝにさきてちりぬるはならはひをへてものは思はさらまし

〔頭注〕此哥初ノ上ニかく暮ユク春ノト云フヲソヘテミルベシ

くさのいとあをやかなるをとほくにし人を思

あさはらみるにつけてそ思やるいかなるさとにすみれつむらん

たれわけんたれかてなれぬ^オこまなんやへしけりゆくにはのむらくさ

そのほとよはのねさめの時鳥まつひとこゑをほのかにもかな

かりのこを人のおこせたるに

いくつゝいくつかさねてたのまゝ、しかりのこのよの人の心を

〔頭注〕四句 梟ノ子ニ假ノ此世

しのひて人にもいふとくちにて

しるければまくらたにせてぬるものをまきとぐちやいはんとすらん^{〇ウ}

たちはなをみてむかしの人を思いて、

かほるかはそながらそれにあらぬかなはなたちのみ^二になり^一にけり^〇

本ノマ、

九月つこもりひさしうおとせぬ人に

秋ふかきあはれをしらはしらさん人も心そたつねきてみん

〔頭注〕四句 心そハこゝをそノ誤

かたらふ人ひさしうおとせぬに

よの人はうらみもやせむわれはた、かゝるしもあはれ也けれ^二

たひにたる人のもとよりたきのはむといひし物のありしたまへと

いひたれとうせにければ

〔頭注〕コ、ノ端書ノサマ哥ニカナハスソコニ哥ノ有シカ脱テ次ノ哥

ノ端書モ有シカ脱タル歟

いたつらにあれはわか身もあるものをはなれむまとて人やとりけん

をかしと思ひしをとこのけさうせしかおとせぬにありしふみにか

きつけて

あとをみてしのふもあやしゆめにてもなことのまたありしともなく

ゆきのふるひいか、なと人のいひたれば

かきくもる中そらにのみふるゆきはひとめもくさもかれはれにして

〔頭注〕古今七 みつね

山里は冬そさひしさまざりける人めも草もかれぬとおもへは

五句ハかれかれノ誤歟^二

わざとうらむへきこともなき人のひさしうおとせぬに

あちきなく思そわたるうらむへきことそともなき人のとはぬを

しのひてあた^カらひたる人のたゝあらはれにあらはるゝ、をかゝるを

はいか、思と人のいひたるに八月はかりに

風をいたみしたはのうへになりしよりうらみてものを思秋はき

〔頭注〕 四句 裏見而二恨ヲ

ものへまうつとき、てもしそのところへかといひたるにきなれは
いかはかり心ふかくもあらぬ身もいけ^うれはたにのそこへこそゆけ

おやはらかなとおなし所にはかにほかへになりてのちたうと
きことするにいひやる

よそなるをなになきけんあふことのあるところとてあは、こそあら
め

人のよふけてきたりけるをき、つけてねたりけるなとつとめてい

ひたるに

ふしにけり^{後拾}さしておも^もはてふえ竹のおとをそせましよふけたりとも

〔頭注〕 初句 臥二節 五句 夜二簡^{二ツ}

つねにわかうへいふときく人のあふきのいとわろきをもちたるを
とりてかきつく

おほかたはねたさもねたしその人にあふきてふなをいひやたてまし

〔頭注〕 後拾

人しれすねたさもねたしむらさきのねずりの衣うはきにをせ

ん

四句 扇二逢

ひさしうおとせぬ人のもとよりほと、きすはき、たりやこ、には
ふた、ひみたひなんき、たりといひたるに

ひとこゑもわれこそきかね時鳥ことかたらはて人のへぬれは

正月一日はなを人のおこせたれは

春やくる花やさくともしらさきたにのそこなるむれきなれは
くさくとおふとはきけとなきなをはいつらけふたに人はつむやは

〔頭注〕 三句 無名二葉

おなしころせうとにせむといひたる人のひさしうおともせぬに
いつのまにいくへかすみのへたつれはいもせの山のかたはみえぬそ

いかにいひたる人にかありけん

すさのをのみことをいのるともなきにいと、しくひさしかるへきとこ
のうへかな

おなしところなる人のことかたにおきてからなてしこ^{二一}を山とな

らぬなんあるとておこせたるに

〔頭注〕 端書ノ山と云々ハ大和ノ誤

かひなきはおなしかきほにおふれともよそふるからのなてしこの花

〔頭注〕 後撰

山かつのかきほにおふるなてしこにおもひよそへぬときのま

そなき 四句 従二唐ヲ

五月五日くすたまおこせたる人に

ひきいてたるほとをおもへはあやめ草つくるたものせはくもあるか
な

またあるやうある人にたてまつるとて

心ねのほとをそみするあやめ草くさのゆかりにひきかけねとも

また人に

みのうきにひけるあやめのあちきなく人のそてまてねをやかくへき

《頭注》 初句 憂二泥 五句 根二哭

しのひてくる人のつとめて人のあらはれぬること、いふにおなし

五日

ひけはこそそのきのつまなるあやめ草たかよのにかねをと、むらん

おなしあさかほのはなを人のもとより

きりのまにみしあさかほの花をこそけふのあやめはいと、わかれぬ

そのよはやうみたる人、きあひてあはれなるもの」^{ニツ}かたりなとするを人のもとよりいかにあやめのねによそふらむといひたるに

あやめ草そのねならねと時鳥なきこそしつれもとの人として

心うしと思ふ人のもとにむめをおこせたれば

むめつかは井せきの水ももる中となりける身をまつそうらむる

《頭注》 四句 成にける身ヲ熟ケル菓子

いくところなとある人あめのふるひつれく物かたりなとして

みるま、に思ふや軒の玉水ももらさぬ中とたれかなるらん

つのくにといふ所にす、きをうゑおきて京にきたるにかのくによ

りおひにたりとてひたるかへりことに

うゑおきしわれやはみへき花す、きあしのほにたにいたさすもかな

もろともにゐなかへなといひしをとこさきてこと女をあていくと

き、て

中くにおのれふなつるひしもこそ昨日のふちをさとしりぬれ

いくかさねといひたる人に

《頭注》 六帖

みくまの、うらのはまゆふいくかさね我より人を思ますら

ん^{ニツ}

とへと思こ、ろそたへぬわする、をかつみくまの、うらのはまゆふ

《頭注》 初句 問二十重

四句 真熊野二見

かたらひし人のなくなりけるをとかうしてみのひいか、とどひ
たるに

《頭注》 端詞 云々みの日云々ハ又の日ノ誤

おもひやる心はたちもおくれしをた、ひた^み。ちのけふりとやみし

月いとあかき夜女のもとよりをとこのもとにうたよみておこせた

りければいかむとていてたつほとにあめふりければつとめてやる

に

こてふかと思ておもひたちしまにさしくもりにし月のかよひて

《頭注》 古今

月夜よしよ、しと人につけやはこてふにたりまたすしも

あらず

心ちあしきころ人に

あらさるむこのよのほかの思いてにいまひとたひのあふこともかな

七月七日人のもとに

たなはたにおとるものかは物をのみおもひそわたるかさ、きのはし

ものへゆくとして人に

いつかたへゆくとはかりはいひてましとふへき人のありと思は、」^{一三〇}

又人に

われのみやおもひおこせむあちきなく人はゆくへもしらぬものゆゑ

おやなといふことありければしのひてはからともなとむかしあ

りしやうにて物かたりするあはれにおほゆれば

いにしへのありしなからにある人も心かなしに物そかなしき

をとこのもとよりきえぬ水のあはかなといひたるに

よしのかはおのかみのあわにあらねともいほうつなみはいかゝたく

る

《頭注》二句 身の二水の

また人に

なかむれはおもひしらるゝ世中にうきもあはれもしる人そしる

人のつとめてのかへりことに

おきてゆく人のこゝろもしらつゆのいまゝて消ぬことをこそ思へ

《頭注》三句 白二不知

物にまで、こもりたるつほねのかたはらなる人のかたらはむなと

いふにあすはいてなんとてかくいふ

たつねすはまつにもたへしおなくはけふくれぬまの命ともかな」^{一四〇}

糸にはなゝみといふ所をかきたるに

よさのうみのあまのたにまつかたに^{あまたのまてかたに}おりやとりけんなみのはなゝみ

はしたてにむまにのりたる人あるところに

こまならん人はなれたりゆくへなくふねなしたるあまのはしたて

《頭注》古今十九 伊勢

おきつなみあれのみまさる宮のうちはとしへてすみしいせの

あまもふねなしたる心ちしてやらんかたなくかなしきに

云々

つくしなりける女京なりけるをとこにかならずあはんとたのめて

こと人かたらひたりときゝてをとこのいひやる

たのむとてたのみかたきはこの世かないかきのまつになみはこゆとも

八月つこもり人のもとにはきにつけて

かきりあらん中ははかなくなりぬともつゆけきはきのうへをたにとへ

人のかへりことに

いつとなくさのみつゆけき花のうへをなにかはかせにしらせしもせむ

ほうりむにこもりたるにかたはらなるつほねのく^{より}だものをあふき

に。〇おこせたるに

いかはかりつとむることもなきものをこはたかためにひろふこのみそ

《頭注》五句 菓子 此身」^{一四〇}

おもはずに心うきことありければなむ心もゆかぬとおやだつ人の

いひたるに

なくさめにみつるにこすはつきもせずきをのみやみてやみぬへし

山よりきたる人のかうなからはえなむ返るましきといひたるに

秋きりはたちかくすともいもかすむならのみやこのみちは^{わすれ}かくさし

人にたのめておもふにあはれなれはいふ

たのめてもはかなくのみそおもほゆるいつともしらぬいのちを
人にたのめて思にあはれよに物にいきてあか月かたにかへりて
物かたりなとして返る人に

たれとなく月はみつるをけさはまつ思おこせよこもかしこも

つらきことなきにしもあらぬ人のあちきなくうらみたるに

わかために人のうきかとつらからはなにことにかはつけてしはん

なま心うしと思人おほかたにきたるに」^{五十五}

うきをしる心なりせは世中にありけりとのみみてやみなまし

ちきりしをなむたのむといひたるしに

人をこそ思もいてめ身のうきにつけてはかりはわすれやはする

九月はかりに人おそくあくとかへりぬるに

秋の夜もあけてやはやむきときはまてかしまきのとはかりをたに

まありたりしかと人のおはすととき、しかはかへりにしといひたる

人に

いとへともかきりありける身にしあればあるにもあらてあるをあると

や

物思ふころやまでらにてかへるとて

^{後拾遺}なにしかは又はきてみむいと、しくものおもひまさる秋山でらに

《頭注》後拾遺云 二句 人もきてみむ 五句 秋の山さと

いみしうものおもはむとちきりたりし人のこと人かたらひたりと

いひつけておとせぬに

いひしをそたのむやさらは人ことにうらみはとふもありぬへけれと

た、よひのまに人のきてとくかへりぬるつとめて」^{五十六}

やすらはてたつにたち^てうきまきのをさしも思ぬ人もありけん

ゆきのいといたうふりてきえかたにはしめて人の思ことのつもり

ぬることなといひたるに

いつしかたとふる雪もきえぬるにうはのそらにもおもほゆるかな

《頭注》二句 譬二降

かみまつる日人、きてかしはのあるをとりてうたかきてとせむれ

は

神山のまさきのかつらくる人そまつやひらてのかすはかくなる

《頭注》三句 操二来

はかなうてたえにしをとこのもとよりあはれなることいひたるか

へりことに

たのむへきかたもなけれとおなしよにあるはあるそとおもひてそふる

た、にあるをとこのとかくあらんにはかならずきてみむといひた

るかそのほとなるにおそくきければ

いたつらにものをそ思ふまつほとこのいのちもしらすけふや／＼と

おなしころとふへ^しとおもふにおとせぬに」^{六十五}

ゆくすゑとちきりしことはたかふともこのころはかりとふ人もかな

とかくあらんにはとはんといひし人のおとつれでやみにしかはほ

とへてかくといひやる

ちきりしはあすかのふちの水なれやいつらこのよにとふ人もなし

おなし人つねにこなたにもひさしうみえねはかくいふ

われゆゑに人の中さへたゆめれはそのむくひさへおそろしきかな

二月つこもりかたに人、きて物かたりなとしてはなのちりにける
さをしなといふに

いたつらにかへらんことを思かなはなのをりにそつくへかりける
おほるにをしみしはなのちりにけるえたにさへこそめはとまりけれ

これをき、て人さくらはいまさきなんちりにけるはなをはなにと
かおもふといひけるに

まさ、まにさくともさかはみにはみむ心にむめのかをはしのひて
ものへいく人にあふきた、ひとつとらすとて」^{一六〇}

ふたつなき心はみにはみせしとてしるはかりにそふるあふきそ
また

たちかへりみやこのかたへいそかすはいつあふことのあらんとすらん
おもへともおもはずとのみうらむる人に

まこもくさまことにわれはおもへともさもあさましきよとの沢水
あめのいたうふる日おなし心になかむといひたる人に

人になにとふそあやしきいかはかりなかつ、くる人われとこそみれ
たちながら人のものなといひてかへりぬるつとめて

なみたさへいてにしかたをなかつ、心もあらぬ月をみしかな
かへされてなまねたう思けむよへはくやしかりけんかなといひ

たる人に
かへるへき人たにみえずしけ、れはいりぬる人はまどふ山ちを

ものへいく人にまぐらはことらすとて

わすらるなうらしまのこかたまくしけあけてうらみむかひはなくと
も」^{七〇}

さしくしのはこにかきて

さまくしに神をそいのるさしくしのさしはなる、が心ほそさに

三月つこもりかたにちりはてかたなるえたにつけて人に

ちりにしはみにもやくるとさくら花風にもあてゝをしみしものを

なま心うかりける人のもとへゆくに

あるほとうきをみるたにうきものをつらき心はと、めてやゆく

すみよしにまでたりける人いとほとへていか、なといひたるに

わすれくさつむほと、こそ思しかおほつかなくてなからへつれば

つのくになる人たひくふみやりしにみぬかといひたるに

なには人なにはのこをかけりけんた、このたひそみつのはま松

《頭注》五句 三津二見

四月はかり人きてよふけて

なつのよをあかしもはて、ゆく月をみにこむとたに思おこせよ

なといて、ゆくとてまつとおしたつれば女

かくはかりたへかたかうきまきのとをさしてゆくかたありけなるか
な」^{七〇}

むめのはなちりてくちをしかりし人の又四月廿夜日のほとにきた

るに

けふもまたなにかはきつるひとへたにちりものこらすやへの山ふき

をりからしたるえたはおかすやといひたれば

さてのみはやましと思てえたをさへをりからしてそ井ての山吹

かたらふ人おほかりなといはれるをむなのこうみたりけるたれ
かおやといひたりければほとへていか、さためたると人のいひけ
れは

このよにはいか、さためんおのつからむかしをとはん人にとへかし

こむとたのめてみえずなりにけるつとめて

くひなたにた、くおとせはまきのとを心やりにもあけてみてまし

かたらふともたち二三人きあひたりときくにいひやる

かたらは、おとらしものをなにことをいふともいふといひかはすらん

くらき夜ほと、きすまつ心」^{八オ}

くらき夜はみれともみえずほと、きすいつくはかりに鳴てきぬらん

〈頭注〉後撰

あかからはみるへきものを雁かねのいつくはかりに鳴てゆく

らん

たちはなのもとにて

こ、にしてまち心みむ時鳥はなたちはなのかをにくしとや

ほと、きすのこゑを山へにたつねにいくをき、て

ほと、きすき、つときかはその山のふもとにわれはいへあしつへし

ものいみにてこもりあたる人のもとよりことつてやらんほと、き

すのこゑきけといひたるに

心してきくへかりけり時鳥そのひとこゑにかよひけりやと

かならすこむとたのめしをとこにそのひ

くれぬまのいのちもかなねぬる夜はわすれにけりとあすこそはいへ

けさうする人のきて物なといひたるほとにこと人のきぬればこれ
かれたちわかる、ほとにあふきをかたみにとりかへてけりつとめ
てはしめの人にいひやる

かたらはん人もなかりつとりかふとおもひしはこやあふき也けり」^{八ウ}

をとこ、れはなとかすてつるとりにたまへとりかへなくはあしか
りなむとておこせたる

人もなくとりもなからむしまにてはこのかはほりもきみもたつねん

あめいたうふりうらめしきことやありけんみをするなどいひたり
ければ

うかるみのあめのしたにもふれはなほ人は身をさへしらせてしかな

〈頭注〉二句 天下二雨

五月はかりきよみつにこもりてかたはらのつほねをかたらひてい
つとて御こせんにあたるにいひおこせたるあめうちふるほとなり

やかてこそかきくもりつれほと、きすなきわかれつるしの、めのそら

をとこ思しりなんとおもひしにつれなきことなといひたれば

あはれをはしらぬならねといか、せんた、おもへかしこりすまにやは

月いとあかき夜人のもとよりその人ともわきてまたしかしといひ

たるに」^{九オ}

よひことに君をこそまでこと人は

人のふみのあるをみて六月はかり

にはのま、おふるくさはをわけきたる人もみえぬにあとこそありけれ

いまはほかにときく人のもとにゆふくれにいひやる

ゆふくれは人のうへさへなけかれぬまたれしころにおもひあはせて

七月一日人に

こよひよりたれをまたましいつしかとをきのはかせはふかんとすらん

秋はなとものさきたるにやますけのさきたるをみて

おときけは人の物思やますけを心みかほにさけるはなかなか

人のもとにその夜

た、にしもほしあひの空をなかめしなあまの川風さむくふく也

いとつれゝなるゆふくれにはしにふしてまへなるせんさいとも

をたゝにみるよりはとて物にかきつたれはいとあやしくこそみ

ゆれさはれ人やほみるちぬさきまつに」^{九ウ}

のちゝもまつはかりこそしのはめとらむるよりもたのもしきかな

たけ

ありし人あらはきなまし風ふけはうへうちそよく竹のよことに

かしは

かしはきはやとにほりうゑんしたくさをかりにくる人なのみ也けり

《頭注》四句 菊二假ヲ

はき

いまさかは人もきてみん秋はきをしたはのいろはわれのみそみる

やまふきあやしさきたる所なり

かはつなくゐてならへる山ふきはむしのこゑする秋もさきけり

《頭注》八月ノ比ナト山吹ノ返リ花ノ咲コト今モアリ

まゆみいろつきたり

きしよりもまたきまゆみのいろつくは秋にいる日につゆやおくらん

《頭注》初句ハき、の誤歟

四句 入二射

あうすち

こつたひしむめをはおきてこれたにもうくひすのきとひとくいふらん

のきのくものい」^{一〇+}

おもはしをあれたるやとにかきくらすくものいかきに風したまらは

七月七日たなはたまちとほにおもふらんと人のいひたるに

ひこほしは思もすらん中ゝに秋はこよひのなからましかは

このころものゆふこゑをたちきゝて人のきこゝんなといひたるに

はきのうへにつゆふきそへしかりかねをうわのそらにもきゝてけるか

な

なきことおひてなけくときゝてわれをあま^かにつにせよといひたる

に

あまかつにつくともつきしうきことはしなとの風そふきもはらはん

《頭注》加茂保憲女集

おほぬさにかきなてなかつあまかつはいくその人のふちをみ

るらん

物へまうて、かへるに火やといふものをつくるをあはれと思てか

へりての夜月をみる

あはれこの月こそくもれひるみつるひやのけふりは今やたつらん

をさなきちこのやみけるをあはれと思へき人のきゝていかゝといひたる

いかばかり思をともしえさりしつゆにいろへるなてしこの花

いまよりはちよそへんといひたるに」^{一〇九}

ちよふへきこまつときは今よりはたゝあさゆふのくさとたのまん

ぬれきぬをのみきることいまははらへすてゝむと人にいひてのち
いかなることかありけんなほこりすまのわたりなりけりといひたるに

かさねつゝ人のきすれはぬれきぬをいとほしとたに人^{おもひ}のおこせよ

〔頭注〕四 甚愛二千

このころそでのつゆけきなといひたる人に

秋はなほ思ふことなき萩のはもすゑたはむまつつゆはおきけり

人にしたくつれたるといひたるにそなたなむ^うたかはしきといひたるに

そなたよりなみたかくともいまはよに我かたきのゝまつはこさせし

うしろめてな心あるをわか心そへてみてしかなといひたるに

ひきかへて心のうち^うちはなりぬとも心みならは心みてまし

はりまのひしりのもとに」^{一一〇}

拾遺

くらきよりくらきみちにそいりぬへきはるかにてらせ山のはの月
ふねよせんきしのしるへもしらすしてえもこきよらぬはりまかたかな

しくれいたうふる日はやうみし人に

ひまもなくしくれ心ちはふりかたくおほゆるものはむかし也けり

〔頭注〕三句 旧二降

こそ春いし山にまてたりしに山中にとまりてやすみなとせしを
またのとしの秋まへをわたるにさぞかしと思ふにあはれにてとは
すれは人なしすゝきそなげなけにすくみてたてるにかきてむす
ひつく

すきゆけはまねくをはなもなかりけりあはれなりしははなのをりかな

みちのくにのかみにてたつをきゝて

もろともにたゝましものをみちのくのころものせきをよそにきくかな

むめさくらいつれおもしろしと人のいふに

さくらよりいろはさこそはふかゝらめかさへことなりくれなゐのむめ

さりにけるをとこのとほきところへゆくをいかゝおもふ」^{一一一}といひ

たれは

わかれてもおなしみやこにありしかはいとこのたひのこゝちやはせし
せき山のせきとめられぬなみたこそあふみのうみとなかれいつらめ

心みにおのか心も心みむいさみやこへときてさそひみよ

いてゝきこえさす

山をいてゝくらきみちにをたつねこしいまひとたひのあふことにより

かせふきものあはれなるゆふくれに

秋風はけしきふくたにかなしきにかきくもるひはいふかたぞなき

〔頭注〕うつほ物語

東宮 差我上

いつとてまたのむものから秋風のふくたくれはいふかたぞな

き

ことくしう、ちくもる物からあめのけしきはかりふるはせんか
たなくて

秋のうちにくちはてぬへしことわりのしくれにそでたれにからまし
きえぬへきつゆのわか身はものゝみそあゆふくさはにかなしかりける

つゆまところまでなけきあかすにかりのこゑをきゝて」^{二三才}

まところまであはれいくかになりぬらんたゝかりかねをきくわさにして
九月はかりありあけに

われならぬ人もさそみむな月ありあけの月にしかじあはれは
よそにてもおなし心にありあけの月をみるやとたれにとはまし

人こひしきに

をしまれぬなみたにかけとまらん心もゆかぬ秋はゆくとも
君をおきていつちゆくらん我たにもうきよの中にしひてこそふれ

人のかへりことに

あさのなにいまはひぬらんゆめはかりぬるとみえつるたまぐらのそで
おなし人の返事に

みちしはのつゆとおきある人によりわかたまぐらのそでもかはかす

下巻（朱書）

原本歌（不明）六十二枚」^{二三才}（朱書）

寛政十一年十二月廿六日寫完

毎水

右和泉式部家集上下卷春海以自筆本寫了

天保三戊辰暮秋執筆至初冬上旬終功

原本歌を假字
也同初下巻
余皆以古假字書之

辰 初冬 十一日

顯忠」^{二三才}

本集上五百三十七首 連哥一首

同 下三百六首

一首」^{二三才}

（こしば りようこ）平成一八年度博士後期課程修了